世界の社窓から　～ウズベキスタン・活動編～

報告者 2022-1 二葉知久

7 月 27 日にウズベキスタンに到着してから、二か月ほど経った。この間、私の同期 2 名はタシュケントにある語学学校に通い、ウズベク語とロシア語を学んでいた。語学研修については後の号で紹介しようと思う。

8 月 29 日に N 調整員と O 現地職員とともに配属先である大学に初日勤務挨拶をしに行った。JICA 側と大学側との顔合わせである。顔合わせといっても、実際は、学科長と今後の活動をどのようにおこなうか、要請内容は合っているかなどの確認のためである。

翌日、同僚やほかの言語教師とも顔合わせをし、自己紹介をした。同僚や学科長の話によると、現在日本語の授業は 4 年生だけにおこなわれていて、1 年生はこれから募集をかけるとのことだ。よって最初の 2 週間、私は授業準備をしようにもできない状態であった。同僚から日本語準備室兼教室があるというので、案内された。部屋は大学構内にあるほかの教室に比べると半分ぐらいの細長い部屋である。書棚には、「みんなの日本語」という定番の教科書はあるが、旧版だったり、1 はあるが 2 がなかったり補助教材が不揃いに並んでいた。それに日本語教材ではなく、小学校の国語や社会の教科書なども混ざっていたので、違和感を覚えた。そこで翌日から早速書棚の整理から始めることにした。後日、職員室の隣には別の日本語準備室があることが判明した。そこは、今は倉庫として使っていて、教室としては使っていない。中には書棚があり、国際交流基金の教材寄贈プログラムで申請された本が並んでいた。日本語教育教材というよりは、ロシア語また

世界の社窓から　～ウズベキスタン・活動編～

報告者 2022-1 二葉知久

は英語で書かれた歴史、経済、文化などの専門書である。やはり、これも授業では使えない。VHS やカセットテープなど歴史を感じさせるものが多くあった。この大学では JOCV が 1990 年代後半から派遣されていたようだ。常時 2 名体制のときもあったようで、選択科目の中の一つではあったが、「日本語」科目は際立っていたようだった。

9 月 8 日に私の授業が始まった。学生は 4 年生 3 名である。いつもどおり大学に行くと、一人の学生が職員室の戸をノックし、日本語の教室はどこかと副学科長に聞いていた。それで、私はそのとき初めて当日自分が授業をすると聞かされたのである。海外の教育機関ではよくあることなどで、動揺はしなかったが、とりあえず、学生の様子を見ながら授業を始めることにした。

9 月 14 日、二人の女子学生が同じように職員室の戸をノックし、日本語の教室はどこかと同僚に聞いた。彼女らは、私がロシア語しか話せないことを聞くと少し困った顔をした。私が Uzbek chagapirmayman（私はウズベク語が話せません）と言うと少し苦笑いをした。そして、私のスマホに電話がかかり、もう一名男の学生が加わった。彼らは 1 年生である。初々しさがあった。私はロシア語と英語、時々ウズベク語を使いながら、教室用語、挨拶、日本語の文字体系について説明した。女子学生の一人はカラカルパクスタン共和国出身で、もう一人はカザフスタン出身、男子学生はウズベク人である。